

伊丹市

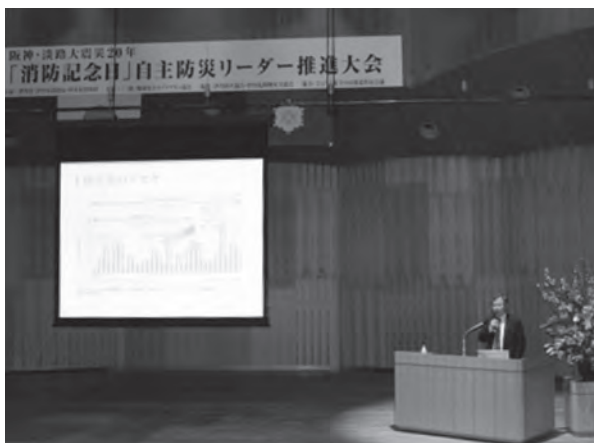
シニア災害ボランティアセミナー開催報告

阪神・淡路大震災20年

「消防記念日」自主防災リーダー推進大会

～自分たちの地域は自分たちで守る～

平成27年2月17日（火）、伊丹市の「伊丹アイフオニツクホール」メインホールにおいて、シニア世代のボランティア参加について考えることを目的に、伊丹市、伊丹市消防局、伊丹市消防団の主催、当協会の共催、ひょうご安全の日推進県民会議の協力により「自主防災リーダー推進大会」が開催されました（参加者数303名）。



冒頭に、上原登伊丹市消防局長の開会のことは、藤原保幸伊丹市長による主催者あいさつが行われました。続いて、第1部に消防記念日式典として、消防活動に尽力された地域の自主防災組織、各種団体、個人に対する消防記念日表彰が行われ、第2部ではシニア災害ボランティアシンポジウムとして、神戸大学名誉教授・兵庫県立大学防災教育センターの室崎益輝センター長による基調講演が行われました。

なお、講演の概要はつぎのとおりです。

基調講演

14:20～15:50

巨大災害に備えるシニア社会

神戸大学名誉教授・

兵庫県立大学防災教育センター長

室崎 益輝氏

災害の動向とリスク、社会の対応状況、ボランティアの現状、減災の考え方、シニアボランティアのあり方など、順序立て、分かりやすく講演いただきました。

1. 災害リスクの動向

災害の多様化と激甚化など、様々な災害、事故、犯罪などが人間の命や暮らしを脅かし、インフルエンザ、食中毒、危険物災害、テロ、誘拐、殺人など、リスクは多岐に亘り、地震や津波だけではないと話されました。続いて、巨大地震災害のリスクも話され、特に、最大震度と想定津波高、倒壊や火災について注意することが必要と提言されました。近年増大している豪雨災害、土砂災害、危険物災害についても説明されました。

2. 社会状況の変化

高度成長期から安定成長期へ、人口増加期から人口減少期へと社会状況が大きく変化しつつあり、主な現象として、①少子高齢化社会の進展、②小さな政府の加速、③地域コミュニティの衰退、④自由時間の減少が挙げられました。更に、高齢者の死亡率の減少、平均寿命の伸展に伴い、高齢者の役割の必要性について、次のことが提

言されました。

①災害や防災について豊かな知見を有し、その知見が生かされると、減災に大きな役割を果たす。高齢化は災害リスクに与って必ずしもマイナスとは言えない。

②災害ボランティア活動や地域防災活動などでシニア世代が大きな役割を果たしている。社会性のある能動的な力や取り組みを引き出すことは、減災にも高齢者の老化防止にも役立つ。

3. 東日本大震災とボランティア

未曾有の大災害により多くのボランティアが必要とされ、その状況についてデータを交え、対応について、次のように説明されました。

- ①甚大かつ広域な被害
避難者45万人、避難所2500か所、
圏外避難10万人以上↓対応には広範かつ大量の支援がいる（大量性）
- ②生活と生業の複合的被災
住宅も仕事も土地もすべてを失う↓多様かつ長期の支援がいる（持続性）

③公的機関の深刻な被災
被災自治体200以上、死亡した自治体職員350人以上↓公的かつ専門の支援がいる（専門性）

また、ボランティアの人数の変化として、大学生ボランティアの減少あげられました。全体としては、阪神淡路大震災をスタートにこれまで少なくとも延べ300万人のボランティアが活動しており、東日本大震災での活動内容と特徴については次のように説明されました。

①組織の広がり↓国際ボランティアや企業ボランティアの参画
②世代の幅の広がり↓団塊の世代から中高生まで

③専門的ボランティアの広がり↓建築家、弁護士、看護師など

④期間の広がり↓長期間の持続的支援
また、東日本大震災で問われた課題として次の点をあげられました。

①災害ボランティアの原点を見直す↓「技・体」の前に「心」、被災者に寄り添う気持ちを忘れず、インセンティブよりもエンパワーメント

②問われた課題の克服をはかる↓行政に依存しない、志は高く敷居は低く、共創のプロセスを大切に。一過性のイベントだけでなく、全国的コーディネーションを適切に。

4. 減災の考え方

減災の視点からボランティアのあり方を

捉え、大きな災害には、防災ではなく減災を考え、被害をゼロにしようと能動的に対処した上で、発生するリスクを社会的合意のもとに許容することと話されました。

また、減災を語るために、「被害の引き算を、対策の足し算で」という考えから、戦略的に効果的に対策の足し算を打ち出すことが話され、そのためには①時間の足し算↓事前や事後の取り組み、②空間の足し算↓大きな空間の対策に小さな空間を足し合わせる、国土、都市、コミュニティそれぞれの対策を足し合わせる、③人間の足し算↓世代を超えた連携、行政や住民だけでなく、NPO、学校、事業所、社協、消防団などの力を足し合わせる、④手段の足し算↓多様な対策を有機的に組み合わせ、ハードだけでなくソフトもヒューマンも足し合わせる、が必要と話されました。

5. シニアボランティアこれから

シニア本人にとっても、社会全体にとってもシニアの活動は欠かせないと話され、シニアにとつては、生きがいと介護予防に役立ち、社会にとつては、自由な時間を社会貢献に費やし、豊かな経験や専門性が生かされると話されました。

シニアは災害や防災についての豊かな知見を有し、その知見が生かされると、減災に大きな役割を果たすと提言され、講演が締めくくられました。



室崎益輝

神戸大学名誉教授・
兵庫県立大学防災教育センター長

1944年8月、尾崎市生まれ。1967年3月、京都大学工学部建築学科卒業。神戸大学都市安全研究センター教授、独立行政法人消防研究所理事長、消防庁消防研究センター所長を経て、2013年より現職。日本火災学会賞、日本建築学会賞、都市住宅学会賞、防災功労者内閣総理大臣表彰、兵庫県社会賞、などを受賞。著書に「地域計画と防火」、「危険都市の証言」「建築防災・安全」「大震災以後」など。